

学制改革の思い出

猛暑が続いていた8月11日に「筆岡村立筆岡中学校跡」という記念碑の除幕式が第74番札所甲山寺の駐車場横の現場で行われ、碑文には次のような言葉が記されていた。

「太平洋戦争の敗戦後に大巾な学制改革があり、市町村に中学校が創設されることになり、筆岡村においても当時の構口安治村長をはじめ関係者各位の多大なる尽力により、旧陸軍第11師団の弾薬庫を改装し昭和22年5月3日に筆岡村彼ノ宗へ筆岡村立筆岡中学校を開校した。開校当初は遠山義夫校長ほか諸先生、生徒、地区住民が総出で運動場などを整備した学校の中を弘田川が流れており鉄橋を渡りトンネルを潜り土塁の中に教室があるという特異な中学校であった。勉学の傍ら研究会スポーツ等に好成績を残し昭和31年3月まで延六百余名の青春の思い出多き学び舎であった。その後町村合併で同年四月善通寺市立西中学校へ統合された。その間僅か9年間の学校であったが、記録の上では開校70周年となるのを機会に関係有志の発意が高まり賛同者各位から暖かいご寄託を得て記念碑を建立し郷土歴史の一端とするものである。」と刻まれている。

この記念碑を拝見して70年程前の学制改革が行われた時代を思いだし、その記憶を辿ってみた。この学制改革が行われる以前の義務教育は小学校6年まで、改革後は中学校3年終了までとなり、その後日本の教育レベルの向上に大きく影響したと思われる。その当時私は吉原村民であり、当時旧制丸亀中学の4年生であったので、この筆岡村立筆岡中学校が開校されたことやその後の変遷などについて知る機会は無かった。今回の除幕式に招かれ記念碑を見て初めて当時の事情を知ることが出来た。

この新制筆岡中学校の開校は学制改革の始まりであって、その後6・3・3・4制という新しい学校制度が次々と実施された。私が学生であった最中に改革は着々と進められ昭和23年3月に旧制丸亀中学校を卒業し、旧制中学校生としては最後の卒業生となった。続いて旧制松山高等学校に入学したものの1年後には全国の旧制高等学校は全て廃校となり、1年間の授業で終わりになった。それと同時に新制大学に進むための入学試験が行われることとなり、2年続けての受験勉強の洗礼を受ける羽目になった。このように私が学生であった頃は、実に学制改革の嵐に翻弄されるという苦い体験ばかりの続いた学生時代であったが、それも70年ほど昔の思い出深い話である。この記念碑はこんな過去の貴重な体験を思い出させてくれるものであった。



転ばぬ先の杖

この8月に2人の曾孫が誕生し、これからの成長が楽しみである。這えば立て、立てば歩めの親心といわれ、歩き始めは嬉しいもので、更に走る、跳ぶなどと運動の領域は広がっていく。このように古代から人間は2足歩行を特技として地球上に君臨してきた。ところが近代文明の進歩は“歩く”という特技を必要としない世の中を作ってしまう、現代人は歩くことの便利さや楽しさを忘れてしまったのでは？とも言われる。更に、歩行という人間にとって最も基本的な生活活動が少なくなると、人体のもつ高度な機能を正常に維持することが次第に弱くなるとも言われる。

近年は少子高齢化が急速に進み日本の将来に不安を感じる状況にあり、社会保障や福祉が重要な課題となっている。高齢になると肩や足腰に痛みを訴える人が多くなり日常生活に不便を感じるらしい。これは年を取ると次第に運動する意欲がなくなり筋力が徐々に衰えて、歩きにくくなるのは自然の成り行きである。そのために古くから“老化は足から始まる”と云われてきた。確かに足が弱ってくると人との交流も少なくなり認知症の傾向も見られやすくなるので“足が弱ると老化が早まる”と考えるのが妥当ではないかとの指摘もある。そのために筋力の衰えを少しでも遅らせることを期待し年を取っても仕事や運動を継続することは大切であると思われる。

“歩く”という行動は日常生活に一番関係が深く、必要性が高く、無理なくやりやすいこととして、新聞やテレビなどでもその有用性が説かれている。しかし、足腰が弱り故障すると歩くことも次第に困難となり、ますます筋力低下を招き転倒の可能性も高くなるので「杖」を使うことが推奨される。このように事前に入念な準備をすることを「転ばぬ先の杖」と云い、これは転倒や骨折で杖が必要になったから使うのではなく、高齢になったら杖を使って転倒の防止をすることの大切さを示唆しているのである。

また、杖を使うと杖に頼って足腰が弱るのではと思うのは間違いで、杖の効用として①曲がった背中を伸ばす働きがある。②足にかかる力を腕に分散して負担を和らげる。③とっさの支えとなり転倒を予防する。④安心感を与える心理的効果などがある。また、早めに杖を使うことで筋力の低下や骨の変化を抑制して、歩く能力の維持を可能にすると共に、杖を使いながらも歩くことは全身の老化現象を抑制すると云われる。

北欧では杖を手には歩く人が多く、古くから暮らしの中に溶け込んでいるという。これに比べて日本では老人に限らず脚の悪い人でも杖を使うのに抵抗を感じている人が多いが、家の中でじっとしているよりも杖を借りてでも外を歩き回るのが体に良いという。更に、屋外で歩くには外界の状況を五官で察知する必要から体のもつ様々な機能の働きを促すもので、全身運動としての価値も高く健康維持にはとても有効である。つまり“たかが歩行されど歩行”であり人間本来の機能として終生大切にしたいものである。